

夏帽子

萩原朔太郎

青空文庫

青年の時は、だれでもつまらないことに熱情をもつものだ。

その頃、地方の或る高等学校に居た私は、毎年初夏の季節になると、きまつて一つの熱情にとりつかれた。それは何でもないとまらぬことで、或る私の好きな夏帽子を、被つてみたいといふ願ひである。その好きな帽子といふのはパナマ帽でもなくタスカンでもなく、あの海老茶色のリボンを巻いた、一高の夏帽子だったのだ。

どうしてそんなにまで、あの学生帽子が好きだったのか、自分ながらよく解らない。多分私は、その頃愛読した森鷗外氏の『青年』や、夏目漱石氏の学生小説などから一高の学生たちを聯想し、

それが初夏の青葉の中で、上野の森などを散歩してゐる、彼等の夏帽子を表象させ、聯想心理に結合した為であらう。

とにかく私は、あの海老茶色のリボンを考へ、その書生帽子を思ふだけでも、ふしぎになつかしい独逸の戯曲、アルト・ハイデルベルヒを聯想して、夏の青葉にそよいでくる海の郷愁を感じたりした。

その頃私の居た地方の高等学校では、真紅色のリボンに二本の白線を入れた帽子を、一高に準じて制定して居た。私はそれが厭だつたので、白線の上に赤インキを塗りつけたり、真紅色の上に紫絵具をこすつたりして、無理に一高の帽子に紛らして居た。だがたうとう、熱情が押へがたくなつて來たので、或夏の休暇に上

京して、本郷の帽子屋から、一高の制定帽子を買ってしまった。
しかしそれを買った後では、つまらない悔恨にくやまされた。
そんなものを買ったところで、実際の一高生徒でもない自分が、
まさか気恥しく、被つて歩くわけにも行かなかつたから。

私は人の居ないところで、どこか内証に帽子を被り、鷗外博士
の『青年』やハイデルベルヒを聯想しつつ、自分がその主人公で
ある如く、空想裡の悦楽に耽りたいと考へた。その強い欲情は、
どうしても押へることができなかつた。そこで、或夏、七月の休
暇になると同時に、ひそかに帽子を行李に入れて、日光の山奥に
ある中禅寺の避暑地へ行つた。もちろん宿屋は、湖畔のレーキホ
テルを選定した。それは私の空想裡に住む人物としても、当然選

定さるべきの旅館であつた。

或日私は、附近の小さな滝を見ようとして、一人で夏の山道を登つて行つた。七月初旬の日光は、青葉の葉影で明るくきらきらと輝やいて居た。

私は宿を出る時から、思ひ切つて行李の中の帽子を被つて居た。こんな寂しい山道では、もちろんだれも見ると見る人がなく、氣恥しい思ひなしに、勝手な空想に耽れると思つたからだ。夏の山道には、いろいろな白い花が咲いて居た。私は書生袴に帽子を被り、汗ばんだ皮膚を感じながら、それでも右の肩を高く怒らし、独逸学生の青春氣質を表象する、あの浪漫的の豪壯を感じつつ歩いて居た。懷中には丸善で買つたばかりの、なつかしいハイネの詩集が這入

つて居た。その詩集は索引の鉛筆で汚されて居り、所々に凋れた草花などが押されて居た。

山道の行きつめた崖を曲つた時に、ふと私の前に歩いて行く、二個の明るいパラソルを見た。たしかに姉妹であるところの、美しく若い娘であつた。私は何の理由もなく、急に足がすくむやうな羞しさと、一人で居るきまりの悪さを感じたので、歩調を早めながら、わざと彼等の方を見ないやうにし、特別にまた肩を怒らして追ひぬけた。どんな私の様子からも、彼等に対して無関心で居ることを装はうとして、無理な努力から固くなつて居た。そのくせ内心では、かうした人気のない山道で、美しい娘等と道づれになり、一口でも言葉を交せられることの悦びを心に感じ、空想

の有り得べき幸福の中でもちもぢしながら。

私は女等を追ひ越しながら、こんな絶好の場合に際して機会チャンスを捕へなかつたことの愚を心に悔いた。

だが丁度その時、偶然のうまい機会が来た。私が汗をぬぐはうとして、ハンケチで額の上をふいた時に、帽子が頭からすべり落ちた。それは輪のやうに転がつて行つて、すぐ五六歩後から歩いて来る、女たちの足許に止まつた。若い方の娘が、すぐそれを拾つてくれた。彼女は恥ぢる様子もなく、快活に私の方へ走つて来た。

「どうも……どうも、ありがたう。」

私はどぎまぎしながら、やつと口の中で礼を言つた。そして急

いで帽子を被り、逃げ出すやうにすたすたと歩き出した。宇宙が真赤に廻転して、どうすれば好いか解らなかつた。ただ足だけが機械的に運動して、むやみに速足で前へ進んだ。

だがすぐ後の方から、女の呼びかけてくる声を聞いた。

「あの、おたづね致しますが……」

それは姉の方の娘であつた。彼女はたしかに、私よりも一つ二つ年上に見え、怜悧な美しい瞳めをした女であつた。

「滝の方へ行くのは、この道で好いのでせうか？」

さう言つて慣れ慣れしく微笑した。

「はあ！」

私は窮屈に四角ばつて、兵隊のやうな返事をした。女は暫らく、

じつと私の顔を眺めてゐたが、やがて世慣れた調子で話しかけた。

「失礼ですが、あなた一高のお方ですね？」

私は一寸返事に困つた。

「いいえ」といふ否定の言葉が、直ちに瞬間に口に浮んだ。けれども次の瞬間には、帽子のことが頭に浮んで、どきりと冷汗を流してしまつた。私は考へる余裕もなく、混乱して曖昧の返事をした。

「はあ！」

「すると貴方は……」

女は浴せかけるやうに質問した。

「秋元子爵の御子息ですね。私はよく知つて居ますわ。」

私は今度こそ大きな声で、はつきりと返事をした。

「いいえ。ちがひます。」

けれども女は、尚疑ひ深さうに私を見つめた。或る理由の知れないはにかみと、不安な懸念とにせき立てられて、私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行つてしまつた。

私がホテルに歸つた時、偶然にもその娘等が、隣室の客であることを発見した。彼等はその年老いた母と一緒に、三人で此所に来て居た。いろいろな反覆する機会からして、避けがたく私はその女づれと懇意になつた。遂には姉嬢と私だけで、森の中を散歩するやうな仲にもなつた。その年上の女は、明らかに私に恋をし

て居た。彼女はいつも、私のことを『若様』と呼んだ。

私は最初、女の無邪気な意地悪から、悪戯に言ふのだと思つたので、故意と勿体ぶつた様子などして、さも貴族らしく返事をした。だが或る時、彼女は真面目になつて話をした。ずっと前から、自分は一高の運動会やその他の機会で、秋元子爵の令息をよく知つてゐること。そして私こそ、たしかにその当人にちがひなく、どんなにしばらく隠してゐても、自分には解つてるといふことを、女の強い確信で主張した。

その強い確信は、私のどんな弁駁でも、撤回させることができなかった。しまひには仕方がなく、私の方でも好加減に、華族の息子としてふるまつて居た。

最後の日が迫つて来た。

かなかな蟬の鳴いてる森の小路で、夏の夕景を背に浴びながら、女はそつと私に近づき、胸の秘密を打ち明けようとする様子が見えた。私はその長い前から、自分を偽つてゐる苦悩に耐へなくなつてた。自分は一高の生徒でもなく、況んや貴族の息子でもない。それに図々しく制帽を被り、好い氣になつて『若様』と呼ばれて居る。どんなに弁護して考へても、私は不良少年の典型であり、彼等と同じ行為をしてゐるのである。

私は悔恨に耐へなくなつた。そして一夜の中に行李を調べ、出発しようと思へた。

翌朝早く、私は裏山へ一人で登つた。そこには夏草が繁つて居

り、油蟬が木立に鳴いて居た。私は包から帽子を出し、双手に握つてむしり切つた。

麦藁のべりべりと裂ける音が、不思議に悲しく胸に迫つた。その海老茶色のリボンでさへも、地面の泥にまみれ、私の下駄に踏みつけられてゐた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆38 装」作品社

1985（昭和60）年12月25日第1刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第八卷」筑摩書房

1976（昭和51）年7月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏帽子

萩原朔太郎

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>